

『外交五十年 幣原喜重郎』

2015年05月28日

幣原喜重郎は大正末期から昭和初期にかけて二度、外務大臣を務め、敗戦後、総理大臣に就いた人である。本人が口実したものを速記した『外交五十年 幣原喜重郎』が1950年に読売新聞に連載された。中公文庫から出版され、それを、今年の4月に改版発行している。大正から敗戦後までの50年間、政治の中樞で接した日本の政治家、軍人たちとの交渉、また国際外交で起こった諸々の出来事を率直に語っている。知りたいことを十分には知り得ないもどかしさはあるが、興味深く読んだ。幣原は「幣原外交」と言われた国際協調政策を推進した。戦争へと雪崩れ込む「強行」路線派からは「軟弱」と攻撃され、命も狙われ、疎外されていった状況が分かる。戦後、新憲法を作るに際し「戦争放棄・軍備全廃」を決意し、提案した宰相として知られている。憲法改定が叫ばれている今日、多くの人々に読むように発行されたのではないか。興味を引かれた三点を紹介したい。

大政翼賛会が猛威を振っていた時、賛否の問い合わせが来た。不賛成の返事を出した。すると事務局から、反対の返事でしたが、それではカドが立つから返事はなっただことにしてくれませんかと言ってきた。入会拒絶の意味だから、そのままいいと答えた。二日後、憲兵が隊長の命令で来て、不賛成の返事では国内一致の態勢が破壊されるので返事を撤回するようにと忠告を告げた。幣原は憲兵に米国とドイツの話をし、彼に問うた。米国の対日宣戦に関する議会で、一人の女性議員が反対票を投じた。ドイツのヒトラーは演説するが、賛否は問わず、自明のこととして決まってしまう。自由意思で賛否を問うのと、一人の発言で自ずと決まってしまうのはどちらが良いかと聞いた。憲兵は、しばらく黙っていたが、敬礼して、このまま帰れば、隊長から譴責されるが、譴責されても構わない、あなたの考えがいいと思う、所信に邁進して下さいと言って帰ったという。

8月15日、日本クラブの図書室で玉音放送を聞いた。無条件降伏を知り、一言も発する者はなかったが、女子事務員がわあっと泣き出し、沈黙は破られた。一生忘れられない感動であったという。帰りの電車の中で、30代くらいの男性が乗客に向かって叫んでいた。戦争は勝った勝ったと聞かされていたが、足腰も立たないほどの無条件降伏ではないか。知らん間に戦争に巻き込まれ、知らん間に降伏する。目隠しをされた牛のような目に遭わされた。怪しからんのは騙し討ちをした当局の連中だ。彼の叫びを聞いて、深く心を打たれ「再びこのような、自らの意思でもない戦争の悲惨事を味あわしめぬよう、政治の組立から改めなければならぬということを、私はその時深く感じたのであった」と語っている。

敗戦後に組閣した時、電車の中の光景が頭に浮かんだ。野に叫ぶ国民の意思を実現すべく努めようと固く決心した。未来永劫、戦争をしない、つまり戦争を放棄し、軍備を全廃して、民主主義に徹する政治に、やり方を変えることにした。「よくアメリカの人が日本にやって来て、こんどの新憲法というものは、日本人の意思に反して、総司令部の方から迫られたんじゃないかと聞かれるのだが、それは私の関する限りそうじゃない、決して誰からも強いられたんじゃないのである」と語っている。

本の帯に『マッカーサー大戦回顧録』からの引用を載せている。「幣原男爵は、私の事務所をおとずれ、新憲法を書き上げる際にいわゆる『戦争放棄』条項を含め、日本は軍事機構は一切もたないことをきめたい、と提案した。私は腰が抜けるほどおどろいた。私が長年情熱を傾けてきた夢だった。」日本国憲法は米国の「押し付け」ではなく、敗戦の激痛が生み出した「宝」なのである。騙されないようにしなければならない。